

## 別れのことば

窓からさしこむ光も、日ましにあたたかさをまし、春のおとずれの感じられる季節となりました。きょう三月十九日、私たちは喜びの中に卒業の日を迎えました。

今、目を閉じると三年前のあの入学式の日のことが、はつきりとよみがえってきます。だぶだぶの制服で不安と希望を胸に、初めてくぐったこの校門、まだちよっぴり寒い風が吹き、ちんちようげの花が道ばたでにおっていました。体育館で自分の名前を呼ばれたとき、さまざまな希望と決意をひめて、力強く返事をした私たち。はじめての授業がうれしくて、くいているように先生の目を見つめていたあの頃。そして、何もかもがあたりしく、フライトに燃えていた私たち・・・。

早いものです。あれから三年にもなりません。

私たちが入学して初めて興味をいだいたのは、部活動でした。

どの部が一番自分に合っているかを知るために仮入部をしました。

毎日のきびしい練習・・・。ことに夏の練習では、じりじりと照りつける太陽のもとで、何度も倒れそうになったことがありました。日頃、べつにうまいとも思わなかった水の味もこの時は、たとえよもなくうまく感じたものでした。

先輩たちがたててくれた練習計画がつまらないと思ったこともありました。でも、いざ自分たちで計画をたてるとき、なんとむずかしかったことか・・・。

今思うと後輩のみなさんにうまく教えることができたか心配です。

球技大会、体育祭は、私たちに団結の尊さを教えてくれました。

一ヶ月も前から準備をし、全員が全力投球をした体育祭。当日、グラウンドにひろがるまっ青な空の下でさわやかな汗を流したあの時・・・。クラスのみんなの心と心がひとつになったことをしみじみと感じたものでした。

優勝をめざし、闘志をもたした球技大会。つらい期末テストも終わり、競技に打ちこむことが最高にしあわせでした。

勝ったときの心のそこからわき出てくるような感激。また負けたとき、くやしさの中から今度こそ勝とうと誓い合った仲間達。

クラスで競い合った学級歌のコンクールもそうでした。

一学期中に学級歌を作りあげ、二学期からは毎日のように優勝をめざして練習しました。コンクールの当日、舞台上に立って足がふるえるのを感じながら歌ったとき、私たちは、クラスが一つにまとまった喜びと、やるだけやったのだという満足感でいっぱいでした。そして、二学期の毎日のようにやった練習が決してムダではなかったという気持ち、一人一人の心の中に残ったのです。

多摩湖畔でのマラソン大会は、私たちにとって大きな試練でした。

走っても走っても見えないおり返し地点。長くて終わりのないような堤防。途中でやめてしまおうと何度思ったことでしょうか。ゴールが目に入ったとき、ほっとしたきもちとともに、うれしさがこみあげてきました。そして最後まで走り終えたという満足感がありました。多摩湖畔のさわやかな空気がなんと気持ちよくかんじられたことか……。

奈良、京都への修学旅行は中でも楽しい思い出の一つです。

四ヶ月も前から学年をあげて事前学習に取り組み、自分の目でもう一つの古都を発見する準備をしました。仏像班、建造物班、年中行事班などを編成し、調べたことを生かすために、コース別見学などの方法も採り入れました。しかし、結果として、見学時間が少なかったため、資料を十分に生かすことができなかったのは、かえすがえるも残念な事でした。

若葉のもえいでる四月、春日野の広々とした平野をぬけると、雨のせいか一段と静かなたたずまいを見せる東大寺や法隆寺、薬師寺が私たちを待っていました。

東大寺、想像以上に大きな大仏に感嘆したとともに、当時の歴史的背景、そして長い長い時代の推移への思いが、みんなの足をしばし止めさせました。

どしゃぶりの中出、雨をうらみながら見てまわった法隆寺……。

薬師寺の三重の塔を背景に天にとどけとせいいっぱいの声で歌ったこと……。

そして、將軍の権力を、そのままあらわしているような二条城。今までみたことのないはずの場面が、なぜかはつきりと目の前にうかんできたのです。廊下を行き来する奥女中座敷の中出、何やら対談している將軍。まるで、私たちだけが二条城の時代へと引きもどされたように……。

旅館では、真夜中にするヒソヒソ話の楽しさ。しだいに声が大きくなり先生にみつかつて全員が星座させられました。眠くて寒くて、先生をうらみもしましたが、今となっては、それもなつかしい思い出の一つとなりました。

志望校合格をめざし、一生懸命がんばった私たち。ときには、今の高等学校制度に強い反感を抱いたりもしました。自分の勉強というものに、疑問をもったこともありました。合格できるかどうかと心配して、気ばかりあせって勉強が手につかない日々が過ぎました。そんな中で常に私たちを励まし、導いてくださった先生。私たち以上に心配して下さった先生方のお心遣いに、心から感謝したい気持ちでいっぱいです。

そして、すべてが終わった今、私たちが得たものは、入試の結果だけではないのです。この一年間、私たちはテレビの誘惑にうち克つことができるようになりました。自分の能力を知ることができました。そしてなによりも、一、二年の頃には味わえなかった一つの目標に向かって全力を尽くした充実感を味わうことができたのです。これらこそが、中学校生活の中で最も貴重な成果であることを、今しみじみと感じています。

国分寺三中の生徒は、りっぱだと外部の人たちからよく言われます。

私たちに対するこの「ほめことば」は、比較的授業をまじめに受けるとか、スポーツの盛んであるということを意味するのだとおもうのです。しかし私たちは、すなおに、このこと

ばを受けて喜んでいるわけにはいかないような気がします。

ほんとうに私たちははりっぱな中学生なのでしょうか。私たちは学校生活の中出自分たちをきびしく見つめるとき、いくつかの恥ずべき点を指摘できるはずですよ。

廊下や教室のおちているゴミを拾う人が何人いるでしょうか。

自分たちの使う教室などのそうじを熱心にやっているでしょうか。

生徒会活動の一番大切な総会に、自分たちの生徒会なんだという自覚を持って臨んでるでしょうか。

残しながらゴミのない校舎内を見ることが困難です。また週番目標で決められた朝そうじもなかなか徹底しませんし、先生にうるさく言われなければ、そうじをしない私たちでした。自分の家や、自分の部屋はきれいにそうじしても、学校はだれかがやると思っているからゴミを見ても、す通りしてしまうのです。

次に生徒総会で、議長が一番多く言ったことばを考えてみて下さい。それは、「静かにして下さい。」この一ことです。いつの総会でも、どの議長にでも、議題とは全く関係のないこのことばを、私たちが言わせているのです。

また、委員選出の日となると、私たちの間では「陰謀」というものがよく行われます。自分以外のひとならだれでもよいという考えで一人の人を推せんし、あとは多数決を暴力的に使って、その人におしつけます。

この「陰謀」というものがでてくるのは、委員にはなりたくないという消極的な気持ちがあるからです。やりたくない人々が集まる委員会は活気がなく、生徒総会にも、意欲的に取りくめないのです。

在校生の皆さん

委員という仕事を敬遠せずに、自分から積極的に参加していただきたいのです。

私たちが待つこれからの生活は、決して安易なものではないでしょう。

しかし、この三年間国分寺三中で学んだ経験を生かし、自分の道を切り開いていこうと思えます。ときには、くじけてしまうこともあるかもしれませんが。

でも、倒れることに、更に強じんな意志をもって立ち上がり、目ざすものが自分にとって、永遠に訪れないものでも、若い力を一度の青春をそれにぶっつけてみようと思えます。先生、そして、おとうさん、おかあさん、どうかじつと見守っていてください。

最後に、校長先生、諸先生方並びに私たちのために一生懸命つくってくださった事務の方々、用務員の方々、そして警備員の方々、長い間ほんとうにありがとうございました。

皆様のご健康と国分寺第三中学校の発展を、卒業生一同心からお祈りし、お別れのことばといたします。

昭和四十九年三月十九日

国分寺市立第三中学校第十二回卒業生

三年答辞委員会 代表

井沢 直樹

江藤 優子